

登別の特養施設長 菊地さんに聞く

介護現場の本音 一冊に

人気ブログを加筆・修正

登別市の特別養護老人ホーム「桜風園」の菊地雅洋施設長(50)が、介護のあり方や介護制度の問題点などを本音で語った著書「人を語らずして介護を語るな。」(ヒューマン・ヘルスケア・システム、1890円)を発売した。インターネット上で1日3千件ものアクセスがある自身の人気ブログを加筆・修正した内容で、介護業界で話題になっている。菊地さんに著書や介護の仕事に対する思いを聞いた。

(森奈津子)

問題点を指摘、職員を応援

著書のもとになったブログ「masaの介護福祉情報板」は、辛口コラムとして全国の介護現場で働く多くの人に支持されています。ブログを始めたきっかけは、

「2001年に僕が働く桜風の公式サイトで介護や福祉に対する自分の考え

や情報の発信を始めたのですが、より自由な立場で自分の思いを伝えたくなり、05年11月にブログを開設しました。ブログも本も読者の多くは福祉・介護の仕事

に就いている人です。もちろん反論もたくさんありますが、厳しい制約の中で働く介護職員を応援するメッセージを込めました」

著書では介護保険制度について「現場を知らない信僚と有識者が制度をいじっているだけ」などと痛烈に批判しています。「介護保険制度は、介護

きゅちまのひの 上山管内下山出身。北星学園大卒。1993年、特別養護老人ホーム「桜風園」に相談員として就職し、2006年から施設長。社会福祉士、介護支援専門員などの資格を持つ。全国各地で介護についての講演をこなしている。



著書を手にと「介護はやりがいのある仕事」と話す菊地雅洋さん

費用の抑制をベースに制度設計され、今や高齢者の暮らしを支えるという本質的な視点を失ってしまっています。制度改正のために給付制限は厳しくなり、必要なサービスが受けられない人も出てきています。財源がないから、介護支援専門員の団体などさまざまな関係団体に対し特別会計から支出されている無駄な研究補助金などを、なぜ切り込まないのか、と問いた後、

「介護保険導入後、働く現場は変わりましたか。制度改正のために保険に必要な記録や書類の作成が爆発的に増え、その代わり、職員が利用者と触れ合ったり、精神的なケアをする時間が減りました。利用者の希望や思いに沿ったサービスを行って介護報酬に加算されにくく、評価されないといった本末転倒な状況も起きています。介護

職員の就労動機は「一人の役に立つ」ことにはずです。現制度では志のある職員はやりがいを失い、辞めてしまふ。介護報酬のあり方を見直ししたり、不要な書類は減らすべきです」

現場で働く介護職員の姿勢についても「もっとプロ意識を強く持つべきだ」と厳しく指摘しています。

「例えば介護現場では、介護者が年上の高齢者の名前を「ちゃん」付けで呼ぶなど不適切な言葉遣いが見られますが、これはプロ意識

欠いた貧困なサービスにはかならない。こうした言葉遣いによって介護者の感覚は次第にまひし、利用者を見下ろす立場に陥りやすくなる」

「福祉の仕事は、利用者の笑顔と、自分が頼られているという喜びによって支えられています。現制度では仕事の楽しさや、やりがいがいづれ忘れがちになります。この本をきっかけに現場職員のモチベーションを高めてもらえればうれいすね」